

理性的な表現に基づいている文化です。

そして他方で日常語で表現された平信徒（そこには女性も含まれます）の文化が存在しています。それは情緒的で詩的な語り口で表される文化です。

このような状況の中でのカルヴァンの役割はこの2つの文化形態を再び一つになるように統合し、それらを区別し、対立させている障壁を取り去ってしまうことでした。その具体例をいくつかあげておきましょう。

伝統的な社会には、“public”という言葉が現在持っている意味、すなわち広い範囲にわたる均一的な民衆など存在してはいませんでした。このような社会は、それぞれが固有の文化的伝統を持っている複数の社会集団、社会団体から構成されていたのです。私はさきほど最も重要な区別、つまり聖職者と平信徒という区別を指摘しておきました。しかし（日常語を用いる）平信徒の中にあつてさえ、貴族は固有の文化（特に軍事、詩、そして小説に関わる文化）を持っていますし、商人とか職人といった都市生活者層は彼ら固有の伝統（特に口承の、演劇に関する伝統）を持っているのです。16世紀の宗教改革とともに顕わになった宗教の危機は社会にきわめて深く浸透し、またきわめて広い範囲に及ぶものであったために、現代的な意味での世論に似たものが形成されることになったのです。つまり伝統的な社会的文化的区分を超越していて、[社会の]かなり広範な範囲をカバーしながら均質であるような一つの階層が形成されたのです。カルヴァンは（ドイツではルターから始まる）この現象の意味を完全に理解しました。そして新しく形成されたこの階層に働きかけることで、フランス語圏の国々に生じたこの現象を利用したのです。しかし宗教改革の考え方を可能な限り広い範囲にまで普及させて民衆の支持を勝ち取ることは、宗教の新しい語り方の存在を前提としていました。それは昔から存在していた境界を、とりわけ聖職者と平信徒を隔てていた境界を乗り越えるような語り方であり、共通の文化の中で諸集団を一つにするような語り方です。この宗教の新しい語り方を「かつての語り方から」区別する特徴とは一体どのようなものでし

うか。

1) 日常語の使用

カルヴァンは始め、ラテン語で書き、考えていました。なぜなら彼自身、神学生であり、法学生であり、ユマニストであったからです。カルヴァンと同じ様な状況にあった彼の同時代人たちは一般にフランス語で自己表現する時には苦勞し、しかもなかなかうまく表現できませんでした。カルヴァンはこの問題を次のような仕方で解決したのです。彼は自分自身で「自らのラテン語著作」をフランス語へ翻訳しました。そしてその一方で彼はほどなく直接フランス語で書き始めたのです。この2つの操作は当たり前なものでも、容易なものでもありませんでした。ここでは文学上の細部にまで言及することは控えますが、次のように言ってもよいでしょう。その結果はけたはずれにうまくいったということです。カルヴァンはラテン語とラテン文化が持っている内容を、軽々としかも明瞭に、日常語へと移行させる才を持っていたのです。

2) 宗教の“民衆的な”語り方の発明

“民衆的な”という用語は、ここでは現代での意味、つまりエリートとは区別された一群（民衆）としての人々を示す意味を持ってはおりません。“民衆的な”という言葉はここではその言葉がかつて持っていた意味で用いられているのです。それは人口全体に関わっているものであり、換言すれば私が既に説明した意味での民衆です。それは抽象的で、観念的な民衆であり、ある社会グループやその特殊な価値観から限定を受けず、商人、職人、聖職者、貴族なども同様にその構成メンバーであるような民衆です。この意味での民衆に合わせたカルヴァンの語り方の「いわば」民衆的な特徴は、次のようなものです。学識あふれる修辭は見出されますが、単純化されています。話の構成は単純です。テキストは簡潔であり、このことが短論文というジャンルでのカルヴァンの成功の原因となります。問題が抽象的である場合、表現は十分に具体的です。カルヴァンは法律の領域から借りてきたイメージを用いています（法律の領域は確かにかなり学問的な文化の領域ではあり